

ピリジン骨格は求電子置換反応に対する反応性は乏しい。一方、ピリジン *N*-オキシドは酸素原子からの逆供与が起こるために求電子置換反応が進行するものの、4 位での反応に限られている。そのような背景の下、ピリジン *N*-オキシドを利用し、3 位を位置選択的に官能基化する手法の開発を検討した。

すなわち、ピリジン *N*-オキシド **1** に酸クロリドを作用させることにより得られる *N*-アシロキシピリジニウム塩 **2a** は高度に電子不足になっており、トリエチルアミンを作用させればジヒドロピリジン **3a** を与えると考えられる。そこで、**3a** が部分骨格としてエナミン構造を有していることを利用すれば求電子剤と反応し、**4a** を与えた後、脱アミンを伴った芳香族化により **5a** を与えると考えた。

本研究では、この実験計画に基づいて検討を行った。また、*N*-アシロキシピリジニウム塩 **2a** の代わりに調製した **5b, 5c** の利用についても検討を行った。

